

く分らぬから、今は僅に其二三を出すに止めて  
おかうと思ふ。

## 一 義 肇

義肇は佛光寺派の人、著書に七十五法略説一卷、入論講義一卷  
同縁起辯一卷がある。

## 二 法 梁

鶯澤法梁も佛光寺派、越後の人、著書に入論講義二卷があつて  
明治二十八年の講義である。

## 三 乘 信

村瀬乗信氏は高田派の人、著書に七十五法略解一卷があつて、  
明治三十九年の著作、謄寫版で出来て居る。(完)

# 無著菩薩傳稿

多 屋 弘

## 四

前節中、吾人が無著の生涯を述ぶるに當つて  
多くの紙數を費して訶梨跋摩の事蹟及び其の思  
想の特徴を叙述せし所以は、無著世親出世當  
時並びに其の已前の印度敎界に於て、從來の傳  
統的敎義に満足し得ずして有部より經部に轉派  
し、或は廣く異部諸學派の敎説を研鑽し自己の  
形而上學的理性及び佛陀所説の經典を標準とし  
て其等の異説を批判し綜合して獨自の新敎學を  
組織し、或は更に進んで小乘より大乘深廣の敎  
理に傾頭せし人々の決して少くなくからざりし事  
を明らかにせんが爲めである。無著世親は實に  
斯くの如き敎界の雰圍氣の中に生れたのであつ  
た。而して兄無著は雜多なる諸法の實有を肯定

する化地部の教義に満足すること能はずして小乗空觀に耳を傾けた。然かも英明冷智なる無著は賓頭羅阿羅漢の教へたる小乗空觀の教説にも心を安んずることを得ずして更に深く悶え悩んだ。彼が諸方の著名なる學匠の門を叩いて安住の法を求め歩いたのも蓋し當然の事と云はねばならぬ。斯くて彼は最後に彌勒に遭ひ大乘瑜伽の教旨を授けられたのである。世親傳によれば「賓頭羅阿羅漢從彼方來、爲說小乘空觀、如教觀之即便得入、雖得小乘空觀、意猶不安、謂理不應止、爾因此乘神通、往兜率多天、諮問彌勒菩薩爲說大乘空觀、還闍浮提、如說思惟、即便得悟於思惟時、地六種動、既得大乘空觀、因此爲名名阿僧伽、阿僧伽譯爲無著」云云。而して西藏傳又同じく無著が彌勒の指導によりて瑜伽の空觀に入りしことを傳へてゐる。前に引用せる彌勒值遇の記事に次いで Taranatha は叙して曰く

「其時法師（無著）は法流の禪定法を得たり『汝は何を望むや』と問はれしかば『大乘を弘通せんことを願ふ』と答へけるに『我が衣の端を握むべし』と命じ給へり。握み終るや否や兜率天に到りぬ。是に就て地部（*Upasika*）と名付くる一派に據れば兜率天に六箇月間住せりと謂はる。或者の説には人界の年數十五年間住せり等と言へる種々の説ありと雖も支那及び西藏に一般に有名となれる説は人界の五十年間住せりと謂はる。然れ共、そは蓋し年數を二倍に計算するが故に二十五年の意なりとは多くの印度人の説なり。即ち兜率天に於て能勝尊（彌勒）より大乘の法を洩れなく聞き、一切經部の意義を心中に蓄へ『慈氏の五法』を聞き各々の義理に達し、禪定に於ける各不同門を得しぬ」と。然るに此處に言ふ所の彌勒が歴史的實在の人物なりしか、或は單に無著の主觀に映せる架空の幻影なりしかは古

來唯識學者の常に疑問とする所であつた。吾人は是れに甚だ酷似する二種の傳説を手近かに見出すことが出来る。其の一は羅什譯龍樹菩薩傳に「大龍菩薩見其如是、惜而啓之、即接之入海於宮殿中、開七寶藏、發七寶華函、以諸方等深奧經典無量妙法授之、龍樹受讀九十日中、通解甚多、其心深入體得實利」云云といへるものであつて、其の第二は善導散善義第四に「毎夜夢中常有一僧、而來指授玄義科文、了更不復見……初夜後觀想彼佛國土莊嚴等相誠心歸命一如上法、當夜即見三具磔輪、道邊獨轉忽有一人、乘白駱駝來見勸『師當努力、決定往生、莫作退轉、此界穢惡多苦不勢貪樂』答曰『大蒙賢者好心視誨、某畢命爲期、不敢生於懈怠之心』」云云。この中、後者は明らかに善導の主觀に描かれたる非歴史的人物であるが、前者は近世史家の研究によりてその所謂大龍菩薩の歴史的存在者な

りしこと、及びその龍宮の地理的位置も略々考證確定されてゐる。果して然らば、いま無著の場合に於ける彌勒はこの二種の類型中、その何れに屬すべきものであらうか。而して吾人は後者の如き場合に於ても、そが單に善導の主觀に映せる幻影なるが故に四帖疏そのものゝ内容が教義上無價值なりとなすものでは勿論ない。吾人は散善義を繙讀する毎に常に善導の熱烈なる求道心に深く感激するものであるが、唯吾人はいま史的研究として教理發展の起源を鮮明ならしめん事を欲するのみである。

無著が瑜伽大乘の教理を授けられしといふ彌勒に關しては古來支那及び日本の多くの教理史家は之を無著の主觀的映像として史的存在に非ずとしてゐる。こは一々彌勒の史的存在なる事を證すべき資料の甚だ乏しき爲めと、且つは無著の師彌勒と將來佛としての彌勒菩薩とが同名

なりしが故に混同せられたのである。この混同は餘程古く六七世紀の印度敎界に存したものの如くで、七世紀の始め玄奘の如き摩揭陀國の那蘭陀 Nalanda 寺に於て戒賢 Siabhadra より瑜伽論の講義を聞けるものであるが、彼の如きすら史的人物としての彌勒と將來佛としての彌勒菩薩とを混同してゐたことは西域記卷四等に據つても明らかである。(この混同の爲めに、後世史的存在としての彌勒に關する資料が意識的又は無意識的に一層缺乏湮滅せらるゝに到つたことは推知するに難くない。)

然るに漢譯及び藏譯の現存論部を見るに彌勒著と無著著とは明らかに區別せられてゐる。其の最も著しき一例を舉ぐれば、瑜伽唯識學派の根本敎義を説ける玄奘譯瑜伽師地論一百卷は彌勒菩薩説としてあり、この瑜伽師地論の綱要を解釋せる顯揚聖敎論二十卷は同じく玄奘譯であ

るが無著菩薩造となつてをり、その内容より見ても瑜伽論と顯揚聖敎論とはその根本の思想は同一であるけれ共、この二論の著者が別人であることは一讀何人にも明瞭である。然るに顯揚聖敎論等が無著の撰述であることは確かであるが、其の師彌勒の傳記が不明であり、進んではその歴史的存在さへも一般に否定せられてゐたことから瑜伽論等の著者もその實恐らくは無著自身ならんと考へられて來たのである。然るに最近宇井伯壽氏は無著の師としての彌勒の歴史的實在の人なりし事を論證せられた。この論證は確かに唯識敎理史の研究の上に一新時期を劃するものであると思ふ。而して吾人も亦兼ねてより多少の疑問を抱いてゐたのであつたが、いま宇井氏の研究によつて疑議全く氷解することを得た。(宇井氏の論文は哲學雜誌第四百十一號及び第四百十三號に掲載しあり) 己下行文上、

混亂を防せがんに爲めに史的存在としての彌勒は單に彌勒 Maitreya とし、將來佛としての彌勒を特に彌勒菩薩 Maitreya Bodhisattva と稱して、彌勒と彌勒菩薩とを嚴密に區別して用ひやうと思ふ。

さて宇井氏によるに彌勒の眞撰と認むべきものは漢譯及び藏譯を通じて少くとも七部現存する。即ち

(一) 瑜伽師地論一百卷 唐玄奘譯

漢譯藏經中に現存する曇無讖譯菩薩地持經十卷、同菩薩戒本一卷、求那跋摩譯菩薩善戒經九卷、眞諦譯決定藏論三卷、玄奘譯菩薩戒本一卷、同菩薩戒羯磨文一卷、同王法正理論一卷の七部は孰れも瑜伽論の分出異譯である。(佐伯定胤氏瑜伽論解題參照)

(二) 分別瑜伽論(全譯不存) 陳眞諦譯

(三) 大乘莊嚴經論(頌) 唐波羅蜜蜜多羅譯

無著菩薩傳稿

大乘莊嚴經論は本頌長行釋共に梵本、漢譯、西藏譯に現存してゐる。而して開元錄第八(結四・六十七)及び宋、元、明、麗の四藏本には何れも無著菩薩造としてある。又現行出版梵本には撰號は無いが、出版者 Sylvan Levi 教授は無著造なりと云つてゐる。然しこの論の西藏譯及び堅意の入大乘論、慧沼の了義燈等には本頌を彌勒造とする。而してこの論が瑜伽論に基き頌文の形式によつて瑜伽論の要義を述べしものなることはこの莊嚴經論の品目が瑜伽論本地分の中の菩薩地の内、その最後の一品を除ける他の全部と品目が殆んど全く符合することによつても知られる。故にこの莊嚴經論の本頌は彌勒造とすべきである。

(四) 中邊分別論(頌) 陳眞諦譯

玄奘譯辨中邊論三卷と同本異譯。

(五) 金剛般若波羅蜜經論(頌) 後魏菩提流支譯

義淨譯能斷金剛般若波羅蜜經論釋三卷と同本異譯。尙義淨はこの頌のみを譯して能斷金剛般若波羅蜜多經論頌一卷を別出してゐる。

(六) 現觀莊嚴論 *Abhisamayalamkara* 漢譯なく梵本の寫本及び西藏譯現存し、その彌勒造あることは *Haraprasad sastri* が論證してゐる。

(七) 法性分別論(頌) *Dharmadharmanata-vibhanga* 漢譯、梵本共になく西藏譯のみ現存する。

## 五

然らば是等の著述をなし、事實上唯識學派の創唱者なる彌勒とは果して如何なる經歷の人なるやといふに、彌勒の傳に關しては今日殆んど何等の資料も存しない。(然し印度にありては歴史上著名なる人にして後世より神の權化とか神となるべき前身なりとか信せらるゝに到りたるが爲めに、資料が意識的又は無意識的に全く湮滅せられて、其の經歷を知るに由なき事が往々

あるといふことである。故に少くとも古代印度史に於ては資料が甚だ乏しいといふ事はその人の史的存在を否定するに充分なる理由とはならない。)然らば如何にして史的存在としての彌勒が將來佛としての彌勒菩薩と混同せらるゝに到つたかといふに、宇井氏に據れば、印度一般の風習として古より今に至るまで弟子は師を尊崇することが非常なもので、師を呼び掛けるに弟子は常に神と言ふ程である。佛教に於てもこの尊崇の風習は最初から存してゐたのであるから無著自身が師彌勒を「將紹種智法王位」といふ程までに見たのも有り得べき事であるし、世親を経て後は一般に菩薩の尊號を以てし、彌勒菩薩と稱するに到つたのであらう。眞諦譯では世親は攝論釋に彌勒菩薩と言つてゐるし、玄奘譯にては聖者大慈尊となつてゐる。佛教内では優れたる人々は菩薩の尊號を附せらるゝのが普通であつて、孫弟子は勝れたる其の師の師をこの尊

號を以て呼ぶことは決して珍らしくない。而して右の如き事情で世親の當時から既に彼が彌勒菩薩と稱せられてゐたとすれば、其の名が當來佛の名と同一なるが故に兩者が混同せられ、何時しか無著の師たる彌勒が將來佛彌勒菩薩なりと思惟せらるゝに到るべきは極めて有り得べき事である。又彌勒菩薩信仰の最も盛なりし當時に於て、從來の小乘及び龍樹の中觀佛教と全く異れる瑜伽唯識教義の新説を權威附けんが爲めに、前者が釋迦佛所説なるに對して後者は兜率天の彌勒菩薩の眞説なりとなさんとして故意に彌勒と彌勒菩薩と同一視するに到つたといふ事も有り得べき事であらう。更に無著の言動より推知するに、其の當時にありては偉大なる比丘は將來佛陀としてこの世界に再現すると信せられてゐたやうである。若しさうであるとすれば彌勒が彌勒菩薩となるのは殆んど必然である。かくして地上の彌勒が天上の彌勒菩薩となる

つた経過は決して不自然な事件ではない。當來佛としての彌勒の信仰が教界内に發生せしは極めて古く、恐らくは原始敎團に既に存したものであらう。之に關して望月信亨氏は「無量壽經の成立年代考」の中に於て「試みに佛教々義の變遷發達せる史的事實に就て内面の觀察を下さんか。釋尊が過古七佛の嘗て此の土に出現せし事を説かれたるは恐らくは疑ふべからざる事實ならん。四阿含經を始め諸律等に毘婆尸佛等の七佛を列ねたるもの五三にして止まず。而かも其の中の第七は即ち釋尊なれば佛陀は自己以前に既に自己の如き六佛の世に出現せし事を認められたものと言はざるべからず、既に斯く自己以前に自己の如き佛陀の出世を認められたる以上は隨て自己以後に亦自己の如き佛陀の出世を認めらるべきは必然の論理なり。されば四阿含等の中には處々に當來彌勒出世のことを記載せられたり。其の出現の時劫等は設ひ後世の

附加とするも、彌勒成佛の信仰は釋尊當時既に成立せるものと見て敢て不可なからん。是の如く過古七佛並に當來彌勒出現に關する大體の所説は思ふに釋尊の直話にかゝるものにして佛教に於ける佛陀論の基礎といふことを得べし」と云つてゐられる。而して無著の生れたる北印度地方は彌勒菩薩の信仰が古くから甚だ旺盛であつたことはかの法顯傳に「度嶺已到北天竺、始入其境、有一小國名陀歷、亦有象僧皆小乘學、其國昔有羅漢、以神足力將一巧匠、上兜率天、觀彌勒菩薩長短色貌、還下刻木作像、前後三上觀、然後乃成像、長八丈足趺八尺、齋日常有光明、諸國王競興供養、今故現在於此……像立在佛泥洹後三百許年（致六・左）とあるによつても知られる。而して無著が彌勒菩薩信奉者であつたか否かは明確ではないが、恐らくは兜率上生主義者であつたのであらう。因みに兜率上生と西方願生とは本來決して矛盾はしない。何と

なれば西方往生は甚だ困難なるが故に先づ容易なる兜率に上生し、其處にて釋尊より大法を遺囑せられし彌勒菩薩に面接し西方往生の要法を聴き、歷劫修行の後彌陀の西方淨土に往生せんとするのが當時の多くの上生主義者の心理であつた。従つて西方願生はその窮極の理想であり兜率上生はその理想へ到達する爲めの前階手段であつた。故に無著、世親に就いて、彼等が兜率上生を願へりとの明證があつても、それは彼等が西方願生者にあらざりしとの證據とはならぬ。寧ろ彼等が熱心に兜率上生を願求せし證據が見出されるならば、それは反つて彼等が更に熱烈なる淨土信奉者なりし事を反證するものであると吾人は考へるのである。尙これに關聯して西域記卷五に「三賢哲每相謂曰『凡修行業願勸慈氏、若先捨壽得遂宿心、當相報語、以知所至』其後師子覺先捨壽命、三年不報、世親菩薩尋亦捨壽、時經六月、亦無報命、時異學咸皆譏謔、



以爲世親及師子覺、流轉惡趣、遂無靈鑒、其後無著菩薩於初夜分、方爲門人教授定法、燈光忽翳空中大明、有一天僊乘虛下降、卽進階庭、敬禮無著、無著曰「爾來何暮、今名何謂」對曰「從此捨壽命往都史多天、慈氏內象、蓮華中生、蓮花纔開、慈氏讚曰『善來廣慧、善來廣慧』旋繞纔周、卽來報命」無著菩薩曰「師子覺、今何所在」曰「我旋繞時、見師子覺在外衆中、耽著欲樂、無暇相顧詎能來報」云云といへる文は古來支那及び日本に於て唯識系統の學者が無著、世親は上生主義者なりしといふ事を論證する際に必ず引用せる有名なる記事であるが、いま吾人がこの西域記卷の五の記事を見るにその説述の内容が極めて荒唐無稽的であるのみならず、信賴すべき他の資料と事實が甚しく抵觸するのである。卽ち世親傳には「阿僧伽法師殂歿後、天親方造大乘論、解釋諸大乘經、華嚴、涅槃、法華、般

若、維摩、勝鬘等諸大乘經論悉是法師所造、又造唯識、釋攝大乘、三寶性、甘露門等諸大乘論。凡是法師所造、文義精妙、有見聞者靡不信求。故天竺及餘邊土學大小乘人、悉以法師所造爲學本、異部及外道論師、聞法師名、莫不畏伏、於阿綿閣國捨命、年終八十」云云。卽ち西域記によれば弟世親は兄無著より先きに入寂し、その兜率天に生ぜし事が存生中の無著に報告せられたといふのであるが、世親傳によれば無著の方が世親より先に入寂し、世親は兄無著の沒後諸大乘論釋を述作した事となつてゐて兩者全く相反するのであるが、之を更に西藏傳に徴するに Taran Itia は記して曰く「法師世親は享年約百歲近くまで住し、聖無著の住せし時は多年の間大いに衆生を利益し、聖者無著の沒後に於ては約二十五年間有情の繞益に盡くせり」といふ。卽ち世親傳と西藏傳とは符號する所が多きのみ

ならず、記述の内容が自然的である。しかれば世親及び師子覺が無著よりも先に入寂せりとなす西域記の記事は恐らく誤謬であらうと吾人は推定するものである。従つて前記西藏記の文によつて無著、世親が兜率上生主義者なりと斷定することは少くとも早計の譏りを免れぬであらう。

己上の如き事情で従來多くの學者は無著の師なる彌勒と兜率天の彌勒菩薩とを混同し、従つて瑜伽唯識の創唱者は無著なりとなしてゐたけれど共、これ全く誤謬であつて、敎理史上唯識説の創唱者は彌勒であり、無著は直接彌勒に面接してその思想を承けたものであり、其の面接聞法の期間は西藏傳では二十五年といひ或は十五年と云ひ六箇月と言つて一定してをらぬ。(世親傳にはこの期間の年限を記してをらぬ)けれど共、面接後可成りの長年月間無著は彌勒に師事した

のであらう。それは無著が所謂兜率多天に於て大乘空觀の敎戰を聞き閻浮提に遷りし後もしばしば兜率多天に昇つて彌勒に諮問し又彌勒自から阿踰陀の講堂へ來つて十七地經を説いたといふやうな世親傳の記事によつても推察することが出来る。

然らば瑜伽大乘の深義を彌勒より示授せられたる後の無著は如何であつたであらうか。これ正に吾人の知らんと欲する所である。世親傳によれば「爾後數上兜率多天、諮問彌勒大乘經義、彌勒廣爲解說、隨有所得、還閻浮提、以己所聞爲餘人說、聞者多不生信、無著法師卽自發願『我今欲令衆生信解大乘、唯願大師下閻浮提、解說大乘、令諸衆生皆得信解』彌勒卽如其願、於夜時下閻浮提、放大光明、廣集有緣衆、於說法堂誦出十七地經、隨所誦出、隨解其義、經四月夜解十七地經方竟、雖同於一堂聽法、唯無著法師得

近彌勒菩薩、餘人但得遙聞、夜共聽彌勒說法晝時無著法師更爲餘人解釋彌勒所說、因此衆人聞信大乘彌勒菩薩教、無著法師修日光三摩提、如說修學、即得此定從得此、後昔所未解、悉能通達、有所見聞、永憶不忘、佛者所說華嚴諸等大乘經悉解義、彌勒於兜率多天、悉爲無著法師解說諸大乘經義、法師並悉通達皆能憶持、後於閻浮提、造大乘經優婆提舍、解釋佛所說一切大教云云。即ち無著は彌勒の教を承け、阿踰陀に還つて餘人の爲めに説いたけれ共、聞く者は多く信を生じなかつたといふのは、瑜伽唯識の教義を全く知らざる阿踰陀地方の多くの人々に充分理解せしめるまでに無著自身が大乘空觀の眞義に未だ體達してゐなかつたのではあるまいか。其處で彼は彌勒に請ひ、仍つて彌勒は阿踰陀に來つて衆人の爲めに十七地經を説いたのである。十七地經とは蓋し瑜伽論のことであらう。現存瑜伽

論の綱要は始めの本地分に盡きると言つてよい而して本地分には五識身相應地已下無餘依地に到る十七が叙述せられてある。故に眞諦は太清四年に此の部分の譯出して十七地論と名付けた。(但し眞諦譯十七地論五卷は既に散佚して現存せぬ)且つ彌勒の説く所が難解なりしが故に無著は後更にこれを復演した。是れによつて衆人は悉く彌勒の大乘瑜伽の教義を聞信することを得たといふ。其後無著は日光三摩提を修し、それによつて嘗つて了解し得ざりし所も悉く通達することを得た。又無著は屢々彌勒を訪ひ、彌勒は無著の爲めに諸大乘經の義理を解説したといふ。然しこの時彌勒が如何なる經典を授示したかは勿論不明である。

而して瑜伽の教義に體達せる後の無著は、西藏傳によれば「衆生を利益せんが爲めに半箇月一箇月等の間遠方に弟子衆と共に旅行し、或は

一日、或は一晝夜旅行せり」と。即ち無著は多く阿踰陀國にあつて弟子の爲めに瑜伽の教理を説き、又諸大乘經の優婆提舍を製作したのであるが、確實に無著撰と認むべき現存著書は以下記する十一部である。

(一) 顯揚聖教論二十卷 唐玄奘譯

本論は偈頌と長行釋とより成立してゐる。而して偶偈のみが無著造で長行は世親作である。玄奘譯顯揚聖教論頌一卷は正しく無著造の本頌のみを別出せるものである。而してこの論が全く彌勒に據り、彌勒造瑜伽師地論の要義を繼承せしものなる事は無著自ら言つてゐる所である。

即ち本論の卷頭に「稽首次敬大慈尊、將紹種智法王位、無依世間所歸趣、宣說瑜伽師地者、昔我無著從彼聞、今當錯綜地中要、顯揚聖教慈悲故、文約義周而易曉」云云

(二) 順中論二卷 後魏瞿曇般若流支譯

論名は具さには順中論義入大般若波羅蜜多經初品法門といひ、龍樹の中論を解釋し、忠實に八不正觀の空を説明し、以て大般若經を會讀すべき入門の書としたものである。而して是れによつて無著は一面龍樹の思想を享けてゐることを吾人は知るのである。

(三) 攝大乘論三卷 元魏佛陀扇多、陳真諦、唐玄奘の三譯あり。

本論は元來大乘阿毘達磨經の攝大乘品を解釋せしものであるが無著の著書中、彼自身の思想の特色の最も鮮明に表はれてゐるものであり且つ新舊三譯あつて、各翻譯者に依つてその紹介せられたる無著の教學が非常に相違してゐる。即ち三譯中、玄奘譯は純然たる賴耶緣起思想であるが、真諦譯は一步進んで眞如緣起的傾向を可成多分に包含してゐる。而して佛陀扇多譯は何れかと云へば玄奘譯に酷似する點が甚だ多い。

かく同一の論本に於て諸種の異譯があり、その異譯が單に譯文の字句が相違するのみならず、根本思想の基調が著しく相違してゐるといふのは如何なる原因によるのであらうか。翻譯の底本がしかく相違してゐたのであらうか、それとも單に譯者の意樂に據るのであらうか。少くとも漢譯藏經を根本資料として印度佛教を研究せんとする者に取つてはこの問題を忽かせにする事能はざる重大問題であると思ふ。吾人はこの問題に關して未だ充分の考究を遂げざるが故に斷言する事は出來ないけれ共、若し吾人の管見を表示する事が許されるならば吾人はこの問題に就きて左の如く答へやうと思ふ。即ち第一、彌勒、無着、世親等の唯識系統の諸論釋に於て新舊兩譯を比較研究するに、其の論文の上に著しき出沒があるのみならず、思想の根本基調が兩者全く相違してゐるのは單に譯者の意樂による

とのみ見る事は出來ない。即ち兩譯はその所譯の底本が餘程相違してゐたものと考へられる。(長泉院普寂著攝大乘論略疏參照次に第二には譯者の師承が又著しく相違してゐた。(十地經論崔光序文參照)然らば何故に原本の相違、師承の相違を來したかと更に溯つて考察するに、恐らく瑜伽唯識學派に於ては無著世親の滅後數個の學派が分立した。その中でも勢力ありしは安慧 *Shīlamati* 學派と護法 *Dharmapala* 學派とであらう。而して護法學派は有爲生滅の阿賴耶識を諸法緣起の根本となし、眞如は諸法の實性なれ共、凝然常住にして隨緣せずといふ。從て依他の相と圓成の性とは融通せずとし、又五性各別を論じ、無性有性は畢竟成佛不可能なりと説くのである。之に對して安慧學派は眞如は常住の一面と共に隨緣の一面を有し、一切諸法は何れも本體眞如の隨緣生起せるものなりと論ず

るが故に従つて五性の差別なく一切衆生悉有佛性にして畢竟皆成佛可能なりと主張し、又依他の相と圓成の性とは融即すと説くのである。而して支那翻譯家中玄奘は明確に護法學派に屬するものであるが、眞諦はその在竺年代より考察するも思想の系統上恐らくは安慧を相承せるものであらう。且筆寫よりも師資口傳を尊重する印度に於ては、各學派によりてその依用の *Text* の内容字句が時代を経るに従つて著しく相違を生ずるといふは有り得べき事である。又同一の字句に就いても各學派に依つて傳統的に解釋の相違を來たすべき事も必然である。かくして同一無著の著述でありながら攝論の三譯が各自非常なる相違を現出するに到つたものであらうと吾人は思惟するのである。

尙この論には世觀（眞諦、達摩笈多、玄奘の三譯あり）無性（玄奘譯）の兩釋論がある。

（四）大乘阿毘達磨集論七卷 唐玄奘譯

彌勒の瑜伽論の思想をその儘繼承敘述せるもので、顯揚聖教論と略々同等の地位に置かるべきものである。但しこの論はその組織の形式が瑜伽本論とも又顯揚聖教論とも全く異つてゐて、寧ろ舍利弗阿毘曇、品類足論等の最も古き小乘論の形式に酷似してゐるのは大いに注意せらるべきである。即ち小乘阿毘達磨の形式に従つて瑜伽大乘を解説せるものであるから、恐らく無著入大乘後初期の述作ではあるまいか。而して無著の弟子師子覺はこの論の註解書を製作したその師子覺の註解と無著の本論とを後に安慧が合糅したものが即ち大乘阿毘達磨雜集論十七卷（玄奘譯）である。

（五）金剛般若論二卷 隨達摩笈多譯

金剛般若經を解釋せるもの。この經は既に彌勒も釋して金剛般若論（頌）を著してをり、世親は

それに釋論を造つてゐる。

(六) 六門敎授習定論一卷 唐義淨譯

頌と長行とよりなり、頌は無著造、長行は世親釋である。始めに「求脫者積集、於住勤修習、得三圓滿已、有依修定人」とあり、世親は之を釋して「此初一頌總標六門」といつてゐる。六門とは求脫者、積集、於住勤修習と並びに師資、所緣、作意の三圓滿とである。即ちこの六門によつて大乘唯識學派の止觀の要法を敎示せんとせしものがこの一論である。

已上は何れも漢譯であるが、漢譯に無くして西藏譯にのみ存し、且確かに無著撰と推定せらるゝものは左の五部である。

(七) 解深密經論

(八) 禪定燈優婆提舍

(九) 聖佛隨念論

(十) 法隨念論

(十一) 僧隨念論

六

後年の無著は上述の如き諸種の著書を撰ずると共に、多數の門弟の敎養に努力したのである而して西藏傳によれば彼の日常生活は持戒極めて堅固であつたといふ。又彼に常隨せる門弟は約二十五人あつた。Taranātha は之を記して曰く「法師と俱に住せる弟子は約二十五人の比丘よりあらざりき。彼等は皆戒律を具足し、經典を持し、自餘の天につきては疑念を斷念し、全く忍癢を得たり」と。然しながら是等の弟子の中に於て、最も卓越せるものは言ふまでもなく世親であつた。而して無著の滅後、世親が無著に代つて諸弟子を薰陶せしことは西藏傳に記す所である。

尙西藏傳は無著に關して、摩揭陀の毘盧婆那

Viluvana といへる園林に彼が伽藍を創立し其處に住して弟子を教授せし事、西方に近き薩伽梨城 Sagari 中の阿守摩補羅 Asmapura といふ伽藍にありて毘毘羅波訖奢王 Zab-Mabiplyogs が施主となつて四方の比丘を集會した時、無著は

「各人の心に適合せしむべく多くの法を教示し、聲聞の三藏と大乘五百の經典とを釋せり」爲めに大乘の教は大いに宣布せられたといひ、且つ其時無著が毘毘羅波訖奢王となした問答が詳記されてある。更に婆羅門婆蘇那伽 Baunaga の請ひにより、無著が南方俱梨濕那閼 Kishnaja 地方に遊化し、大乘を宣布し百餘の法塔、二十五の佛殿を建立したことを傳へてゐる。然し是等は唯西藏傳にのみ存し、之を證すべき他の方面の資料が全く存しないから、是等西藏傳の記述の正非は勿論保證することは出来ない。唯此處に特記すべきは彼が弟世親を教戒して小乗よ

り大乘に轉入せしめた事である。この事は世親傳、西域記卷五、西藏傳に何れも記述する所であり、世親自身の思想上に一新紀元を劃すべき重大事件であるから、吾人は他の機會に於て之を詳論しやうと思ふ。

無著の晩年に關しては、西藏傳に「晩年に及び那爛陀に十二ヶ年住し、冬季には毎日外道の論客來りしかば諸原理の種々の明智を以て駁し約一千人の外道は出家せり。而して總べて伽藍に於ける比丘の見解と戒律と行と衰頹せる諸の儀軌を法の如く完全に肅正し、之に依つて僧加は非常に純潔にせられたり。終りに王舍城 Rajagṛha に入滅せり。其の遺跡に諸の弟子塔を建てぬ」と云つてゐる。然し無著が摩揭陀に永く行化したか否かは甚だ疑はしく、且つ那蘭陀寺が講學の中心地となつたのは恐らくは無著世親の滅後、西歷五世紀の中葉已後で西域



記九及び義淨の西域求法高僧傳上共に那蘭陀寺の創立者は摩揭陀國王鑠迦羅阿迭多王 *Satraditya* (譯曰帝日)であつて、其後佛陀毬多王 *Buddhagupta* 咀揭他毬多王 *Tathagatagupta* 等の諸王が漸次増築し、玄奘入竺の當時は恰かも其の最隆盛であつたのであるが、後蜜教が興起し毘柯羅摩戸羅 *Vikramaditya* 寺が其の中心となるに及んで那蘭陀寺は衰微した。従つて無著が那蘭陀に住して十二ヶ年講學したといふのは西藏にのみ傳はれる後世の誤傳で、恐らく事實ではあるまいと思ふ。且つ西藏傳には王舍城に於て無著が入寂し、その遺跡に諸弟子が堂を建立したと言ふけれ共、西域記卷九の王舍城の條下には何等無著の遺跡が記されてない。のみならず世親傳では世親の入寂した場所を阿踰陀としてゐるから(西域記卷五同之)恐らく無著も亦阿踰陀の僻地に於て靜かに永眠したものであらう

と吾人は推考するのである。而して諸傳を綜合するに無著は餘程の長壽を保つたのは事實らしい。然し正確な年齢は勿論不明である。(終)

(附言)

本稿起草に際し寺本婉雅教授が萬苦を忍耐して西藏より特に將來せられし *Taranatha* 著印度佛教史の原語譯の借覽を筆者の爲めに快諾し下されし事を篤く感謝する。

## 先 德 餘 香

後學 南條 文雄集

易行院法海講師之詩 熊本所見

美人畫贊

佛言大魔王、或說過大蛇、噫吾何翳膜、唯見顏如花、

雲華院大含講師之詩 各地所見

辛卯(天保二年)元朝

祖山依例拜年新、佛日皇風及小臣、讀起彌陀經